

歴史の中の女たち

＜第4回＞

チリの生みの母：イネス

伊 藤 滋 子

16 世紀のスペイン、男たちは雪崩をうって新天地インディアスへと渡っていった。あとに残されて『インディアスやもめ』となった女たちは社交を絶ち、黒ずくめの喪服を着て、家族や教会の監視を受けながらひっそりと尼のような生活を送らねばならない。イネス・デ・スアレスもそのような女のひとりであった。夫のフアンとの結婚生活はわずか 2、3 年で、しかもその間、裁縫や刺繍の仕事やエンパナダを作って売ることで、生計は彼女が支えていたほどだから、祖父と母がいる実家に戻っても、暮らしはそれほど変わらない。子供もいないので病院で尼僧を手伝って患者の手当てをしたりもする。井戸を掘る場所を探しあてるといふ母親譲りの特技があり、その仕事もよく頼まれた。お金をもらうとその能力は失われるというので礼は受け取らない。夫からの便りは 7、8 年の間に 3 通だけで、いずれもベネズエラからだった。字が読めないイネスは教会の僧にそれを読んでもらい、ついでに返事も書いてもらう。

普通の女より行動力のある彼女は、いつまで続くと分らないこの生活に耐えられなくなり、ついに夫の元に行く決心をした。少なくともインディアスに行けば束縛から逃れて、もっと自由に生きられるよう

に思えた。渡航許可は数年がかりでようやく下りたが、女の一人旅は許されず、家族の同伴が必要だった。そこで、夫と合流した暁には僧院に入れるだけの持参金をつけてスペインへ帰すという約束で、姉から 15 才になる姪を借り受けた。モーロ人、ユダヤ人ではなく、旧キリスト教徒の家系に属することを証明する二人の証人が必要であったが、祖父が教会の信徒団の役職をつとめており、問題はない。しかしイネス自身は肌も浅黒く、祖先にはモーロ人の血が混じっていると感じていた。

30 才でインディアスへ渡った彼女はカルタヘナ、パナマと夫の消息を求めて渡り歩き、最後にたどり着いたペルーの古都クスコで夫はすでに戦死したと知らされた。それを聞いた時、「戦死ですって？フアンは兵士などではなかったわ」とイネスは思わず反論したが、「ここには他の職業などないのだ。僧でさえ剣を握る」と諭された。夫が死んだのはアルマグロとピサロがペルーの覇権をめぐって対決したサリナスの戦いで、何と彼はピサロの弟エルナンドの派手な服を着て戦場に出て、真っ先に標的にされて殺されたという。遊び人の夫のこと、借金でもあつて服を交換することを断りきれなかったのだろうことはイネスにも想像

がついた。丁度その頃クスコにいたピサロは、弟の身代わりに殺された男の未亡人が来ていると知ると、同情からか、あるいは後ろめたさも手伝ってか、彼女を引見して弔意を伝え、住む家とペルー人の使用人数人を与えてくれた。

一緒に来た姪は、尼になるどころか、上陸するとすぐに船の中で知り合った男と結婚してしまったので、インディアスでイネスは文字通り天涯孤独となった。身寄りも財産もなく、女ひとりでペルーの内陸までたどり着くだけでも大変な苦労であった。しかし8才の時から裁縫や刺繍の仕事で家計を助けてきた彼女は心身ともに逞しく、雑草のように強い。ペルーではまだ職人も少なく、裁縫の仕事はいくらでもあったし、彼女が作るエンパナダは飛ぶように売れた。戦争続きで怪我人も多く、尼僧から教わった治療の知識も大いに役だった。こうしてクスコに落ち着きはじめて時、彼女はとびっきりの男と出会い、たちまち恋に陥ちる。

その男バルディビアはイネスより2才年長の34才で、当時クスコでも一、二を争うエンコメンデロ（土地持ち）であった。ところがバルディビアはサリナスの戦いでピサロ軍の指揮官を務めたにもかかわらず、敗軍の将アルマグロの男気に打たれ、獄中にかれを訪れては話を交わすうちに、ピサロから授けられた銀山などのエンコミエンダを投げうって、アルマグロが果たせなかったチリ征服に乗り出すつもりになっていた。狡猾なピサロのやり方は一本気な彼の性に合わず、できうる限りペルーから遠く離れてその影響から逃れたいと思ったのだ。

チリへの道は険しく、過酷な旅となることはアルマグロから聞き知っていた。しかも金も銀も出ないが、そこには植民に適した豊かな土地があるという。地道に働こうという意欲のあるものだけの理想郷が作れる、と語るバルディビアに、イネスは熱い共感を覚え、この男とならどんな苦労でもできると思った。ただ一つ、バルディビアにはスペインに残してきた妻がいるため二人は結婚できず、イネスは愛人という立場に甘んじなければならない。

1540年1月、バルディビアとイネスはクスコを出発した。しかし高い志とは裏腹に、同行者はただの11人で、もちろんイネスは唯一のスペイン女性である。あとは荷担ぎのペルー人従者、黒人奴隷、そして隊員の愛人のペルー女性であった。スペイン人500人、ペルー人8千人で鳴り物入りで出発したアルマグロの隊とは較べようもない。それでも途中から参加する者や後を追いかけて来るグループがあつたりして、人数は徐々に増えていった。隊は海岸沿いの砂漠を通るルートをとったが、それは想像を絶する厳しい旅であった。女のなかには妊娠しているものもいたし、家畜も連れているのだから、歩みは遅い。アルマグロの遠征で散々痛めつけられた先住民はスペイン人が戻って来たと知ると、食料を地中に埋めて隠したり井戸に毒を投げ込んだりして逃げてしまい、隙をみては家畜や女を掠め取りに来る。昼夜一刻の油断もできず、小競り合いは日常茶飯事だった。砂漠に入る前にイネスは女たちに指図して暑さ寒さを避けるためのマントや干し肉などの保存食を

作り、なるだけ家畜を太らせた。水が底をついた時には、例の地下水を見つける特技で何度も隊を救った。砂漠が終わると先住民の襲撃はいつそう激しくなり、怪我人の手当ても彼女の重要な役目となった。必要な時には手足を切り落とすような外科手術まで行い、食料が少なくなると食べ物に工夫をこらすイネスは隊にとってなくてはならない存在であった。常に向上心が旺盛な彼女はそんな旅の中でも、バルディビアから武器の扱い方や防具のつけ方を習い、神父から読み書きを教わるのだった。

クスコを出てほぼ一年後、ついに隊は目指すマポチョ川の平野に着いた。確かにそこは緑豊かな素晴らしい土地で、周辺には1万人ほどの住民が住み、道路や畑もよく整備されていた。しかしかれらはこちらの様子を伺うだけで、新参者を歓迎する雰囲気ではなく、かといって攻撃してくるわけでもない。その住民はインカ帝国から来たものの子孫であった。隊は物々交換でかれらから食料を得たりすることはできたが、友好関係を結ぶには至らない。だがスペイン人の本当の敵はこれより南に住むマプチェ族であった。男も女も、子供までもが勇猛果敢で、まるで戦争のために生まれたような種族である。どんな拷問を受けようと口を割ることはない。何よりも自由を尊び、金、地位、名誉などには一切執着を持たず、自分が担いで運べるだけの物しか所有しない。誰に服することも潔しとしないが、戦争の時だけトキと呼ばれる指揮者を戴く。そして固い結束でインカ帝国の侵入を退け、アルマグロにチリ征服を断念させたのであ

る。かれらの勇敢な戦いぶりは敵であるスペイン人にまでも感銘を与えずにはおかず、征服者の一人エルシリャは、インディアス最初の叙事詩『アラウカナ』を書いて、マプチェ族への賛歌を高らかに謳いあげた。

1541年2月、バルディビアはマポチョ川畔にサンチャゴの町を築き、スペイン人150人、ペルー人使用人400人で町造りが始まった。そして一年後、建物も増え、ようやく町の体裁が整ってきたところへ、まるでそれを待っていたかのようにマプチェ族の大々的な攻撃があった。それは実に巧妙に仕組まれた計画的な攻撃だった。かれらは前もって北の町を襲撃し、バルディビアが兵の半数を率いて救援に向ったのを見届けてから、サンチャゴを襲ってきたのだ。攻防戦は何時間も続いたが、何十倍もの人数の敵はこれ見よがしに休息して、交代で戦うのに比して、人数の少ないスペイン人



の方は時間を経るにつれ疲弊が激しく、戦力は目に見えて消尽していった。そして遂にはほとんどの建物が焼き尽くされ、残るのは広場の周りだけとなり、全滅も時間の問題かと思われるばかりになった。この時、それまで女たちを指揮して食料の補給や怪我人の手当てをしていたイネスが、「人質を殺しなさい！」と叫んだ。牢には、反乱を防ぐために、捕らえた7人のトキがつかわれていた。驚く男たちを尻目に彼女は次々に人質の首を切り落とし、それを敵の真っ只中に投げ込んだのだ。度肝を抜かれた敵がたじろぐ隙に、防具をつけた彼女は馬にまたがり、スペイン兵を鼓舞して回り、町は寸でのところで全滅を免れた。建物、食料、家畜、衣服、畑の作物など、すべてを失ったサンチャゴで、かろうじて残った雑草や家畜を育て、種を蒔き、工夫を重ねて人々を飢えから救ったのも彼女であった。空腹に耐え、ぼろを纏いながらも、バルディビアと心をつなげて同じ目的にたち向かっているという実感のある間、彼女の心は満たされていた。

しかし、サンチャゴに来て6年後、突然バルディビアはイネスを残してペルーへ行き、王命を受けて内乱を鎮めようとしていたラ・ガスカの軍に加わる。そしてその功績により正式にチリ総督という称号を得た上、幾つもの讒訴に対する釈明が聞き入れられて、名誉を回復した。が、堅物の僧であるラ・ガスカは、イネスとの関係だけは許そうとせず、彼女をスペインまたはペルーへ送り返し修道院に入れて罪を悔い改めさせるか、でなければ他の男と結婚させよ、

と命じた。サンチャゴでバルディビアの帰りを待ちわびていたイネスにとって、その命令はまさに晴天の霹靂であった。今になって心血を注いで守ったサンチャゴを去ることは到底考えられず、自由を求めてやってきたのに修道院に入ることなど論外であった。かといって無理やり結婚させられるのでは誇りが許さない。そこで彼女は自ら進んでバルディビアの最も忠実な部下であったキロガを夫に選び、正式に結婚する。イネス42才、キロガ38才であった。キロガにはペルー人女性との間に生まれた幼女がいたが、疫病で母親が亡くなったあと、子供のいないイネスがこの女兒を引き取って育てていたから、この結婚は少しも不自然ではなく、誠実な人柄の夫は終生彼女を大切にし、二人は共に70才を越える長寿を全うし、サンチャゴの繁栄に多大の貢献をした。

一方バルディビアはペルーから戻ると、サンチャゴをキロガに託して南に遠征し幾つもの町を築いた。それは一見成功であったが、数少ないスペイン人で多くの町を守り続けることは難しく、やがてマプチェ族の反乱で殺される。イネスがキロガと結婚して4年後のことであった。それから数年して、生前バルディビアがスペインから呼び寄せた妻がサンチャゴに着いた。同じような境遇を経験したイネスは寄る辺のないこの未亡人に同情を寄せ、生涯その面倒を見た。不屈の精神とともに真の意味において生きる知恵を備えた女性イネスは自分の子供を生むことはできなかったが、チリの母となることができた。(いとう・しげこ)